

Title	<紹介>E. Juillard et H. Nonn (eds.) Espaces et Regions en Europe Occidentale, structures et dimensions de regions en Europe occidentale
Author(s)	西村, 孝彦
Citation	史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (1980), 63(2): 335-336
Issue Date	1980-03-01
URL	https://doi.org/10.14989/shirin_63_335
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

ざるを得なかった。喜びと満足を持ちうる労働とは一体どのようなものなのか、と。憂うつなのは、この問いには依然として解答が与えられていないからである。ともあれ、社会思想史の傑作である本書をできる限り多くの人々が読まれんことを切望する。

(一八七頁 一九七八年 Chicago, The Univ. of Chicago Press)
竹田 有 京都大学大学院生)

E. Juillard et H. Nonn
(eds.): *Espaces et Regions en Europe Occidentale, structures et dimensions de regions en Europe occidentale*

本書はルイ・バスターール(ストララスプール)・大学名誉教授の E. Juillard と同大
学教授の H. Nonn をディレクターとする
西ヨーロッパにおける地域空間に関する共
同研究グループの研究成果をまとめたもの
で、このメンバーには彼らの他、H. Rey-
mond, R. Kleinschneider, S. Rimbart, M.
Pruvot, C. Carvin の五名が参加してゐる。

このグループのリーダーであるジュイヤーは現代フランス地理学界を代表する地理学者の一人で、長らく「地域」ないし「地域空間」に関する研究に取り組んできた。本書は、このジュイヤーの規定する「地域」概念並びに彼の提唱する「地域空間の一般地理学(La géographie générale des espaces régionaux)」の枠組の中で、西ヨーロッパにおける「地域」を経験的及び理論的に分析したものである。ジュイヤーの定義する「地域」とは機能空間としての地域、つまりある中心、ある都市によって組織づけられた空間を意味し、それは機能空間の階層でいえば、国家空間より一段階下位に位置づけられる土地の枠組をもつ空間を指す。

ところでこのような地域概念の立場から行なわれた地域研究は、一九六〇年代以降、A. Thiabault, B. Dézert などのモノグラフをはじめ、既にかなり多くの蓄積をみできた。にもかかわらず、総じて機能空間としての「地域」の一般化ないし体系化を志向する動きは極めて少なかった。ジュイヤー

ールの標榜する「地域空間の一般地理学」はまさにこの点を目指そうとするものであり、本書は先述した如くこうした研究の一貫をなすものである。即ち本書の目的とするところは、西ヨーロッパにおける諸地域の発生、構造化並びにディメンションはある一定の論理、面積、人口、都市網に関するある一定の規範に対応しているかどうか、つまり西ヨーロッパの諸地域に存在する *gabarit* は一つなのか、それとも多数あるのか、それを見極めることであつた。

本書は序論以下大きく三部から構成されている。第一部「西ヨーロッパにおける同質領域の画定」では、第二、三部での理論的及び経験的方法による地域の *gabarit* の検討に先立って、その基礎作業が行なわれる。著者たちは先ず各地域の *gabarit* はそれの属する空間タイプとそれぞれ対応関係にあると仮定し、西ヨーロッパ内部における空間タイプを抽出するために、都市の分布状態(*semis urbain*)、人口密度、産業活動、人口推移、交通機関の五つを指標にとり、その地図化から同質領域区分を行なう。

その結果三つの空間タイプが認められた。一つは圧倒的な吸引力をもつ巨大都市によって組織づけられたバリ型空間、今一つは巨大都市を欠くけれども高度に発達した工業化を背景とした都市密度の稠密なライ型空間、第三のものは相対的に経済的後進性を示す周辺型空間である。さらに発展段階からみてバリ型空間は三つに、周辺型空間は二つのタイプに分けられるとし、各空間タイプの様相が述べられている。

第二部は「地域構造の理論的アプローチ」である。第一章では第一部で確認された各空間タイプの全般的性格、アクセシビリティ及び市場圏、中心地の人口などの具体的要素から各タイプに対してどのような理論的な地域 *sabarity* が構築されるかについて述べられている。次いで第二章では主要都市の人口と等時曲線によって設定されたアクセシビリティをもとにしたグラビティ・モデルを用いて都市の理論的勢力圏が画定されている。そしてこのようにして得られた勢力圏を第一部で確認された空間タイプと対比することによって、各空間

タイプごとに構造並びに構造化のプロセスが非常に異なっていることを示唆し、さらに理論的 *sabarity* と理論的勢力圏とも対応することを暗示する。

第三部「機能空間の諸タイプの同定、その理論的モデルとの比較」では、高次サービスクラに關する既往の研究成果、あるいは買物行動、自動車交通流などを指標にとり、現実の都市の勢力圏、つまり機能空間が設定される。次いで第二部で構築された地域の理論的 *sabarity* 並びにグラビティ・モデルによる理論的勢力圏の妥当性を検討するために、先の現実の勢力圏との比較がなされ、両者の間に明確な相関関係のあることが指摘されている。結局、空間タイプ、理論的 *sabarity*、現実の機能空間の三者の間には密接な関係があり、かくして空間タイプと地域 *sabarity* とは対応関係にあるという最初の仮定は立証されたことになり、西ヨーロッパには空間タイプに対応した三つの地域 *sabarity* が存在することを主張する。

そして結論の部分では地域整備政策につ

いてふれ、ここで見い出された3つの空間タイプの存在を考慮し、それぞれに見合った整備計画を立てるよう提言している。

このように本書では発展段階ということが一部問題とされているが、ここで展開されたものはいわば現状分析であった。かつてジュイヤールが地域空間の一般地理学にとつて重要な側面として掲げた地域空間の歴史的展開過程の分析が行なわれなかった点は少々物足りなさを感じる。今後著者たちによってこの点に關する研究がすすめられることを望むしだいである。

(一四頁 一九七六年 Paris, Centre National de la Recherche Scientifique)
西村孝彦 京都大学大学院生